

学童クラブ、「総合的な学習の時間」、絵本読み語り、高校生ボランティア

大人はもっと子どもと向き合おう！

特集
座談会

地域は子どもを育てられるか？

子どもの教育環境が大きく変化し、地域社会の教育力に期待がかけられている。だが一方で、家庭、学校、地域社会の教育力の低下を指摘する声もあり、学校と地域、子どもと地域の関係の再構築が求められている。果たして、地域は子どもを教育できるのだろうか。長い間学校と地域社会の双方に軸足を置いて活動してきた4氏に、その可能性を語り合ってもらった。



富塚 修子 氏

昭和52年山形女子短期大学(現山形短期大学)幼児教育科卒業。山形県内の児童福祉施設、社会福祉施設勤務を経て、昭和57年から現職。

まずは自己紹介と現在の活動状況から。富塚 昭和五十六年に学童保育指導員になり、昭和五十七年から第九学区学童保育あかしあクラブ指導員として勤務している。施設は学校(山形市立第九小学校)から徒歩十分くらいのところにあり、建物の前は公園になっている。あかしあクラブでは、基本的に親が仕事で日中家にいない子ども(小学一年生から三年生)を預かっている。山形市の補助事業として市から補助金をいただいております。足りない分については月額一万二千円の保育料でまかなっている。この建物は、子どもたちにとっては家と同じようなもので、来る時には「ただいま」と言って入ってくる。そして、まずは宿題をさせ、それからおやつを食べたり好きな遊びをしたりして時間を過ごす。もちろん、後片付けは子どもた

ちが自分です。保育時間は午後六時までで、必ず保護者が迎えに来ることになっている。鈴木 私は千葉県の出身だが、縁あって十年前から寒河江市内に眼科医院を開業し、西山郡十二校の校医もしている。また、「絵本読み語りの会」を結成し、学校の朝自習の時間(八時半から十五分間)に教室へ出向いて絵本読み語りのボランティアをしている。ちなみに、今は小学校四校、中学校一校に出向いている。最初のきっかけは、私の妻が六年前に、寒河江小学校で絵本の読み語りを始め、たことだったが、その後、活動の輪が広がり、現在では寒河江市内のすべての小学校区に、

話し合った方々

寒河江絵本読み語りの会代表・眼科医

鈴木 一作 氏

山形市立第九学区学童保育あかしあクラブ指導員

富塚 修子 氏

山形市立第十小学校教諭

張 崎 正 裕 氏

山形県高校生ボランティア活動基金主宰

堀 米 幹 夫 氏

(五十音順)

(司会) 莊銀総合研究所副理事長

石 川 敬 義



鈴木 一作 氏

千葉市出身。山形大学医学部大学院修了(医学博士)。平成5年に寒河江市に開院。平成9年より絵本読み読みのボランティアを始める。

独自の読み語りグループができています。もつとも、私はこうした活動が好きなので、いくつかのグループに横断的に参加している。他にも、地域の子ども育成事業やPTAの活動、県の学校評価に関する調査研究委員なども務めており、日常の診療以外は「子ども」に係ることはやりやっています(笑)。

堀米 私は二十五年間、高校生を主体としたボランティア活動の育成に力を入れてきた。これは、学校単位ではなく、地域単位によるものだ。そして、誰でも入れることができ、かつ活動を楽しもうというのが特徴である。現在、四十四市町村に八十のサークルがあるが、同じ名前のものは二つとない。それぞれのサークルのメンバーが、自分たちで名前を考え、自分たちで主体的にボランティア活動をしてきた。こうした活動は、「山形方式」と呼ばれ、国の中央教育審議会でも注目されている。そして、昨年七月に中教審が発表した答申では「青少年の奉仕活動の事例」として紹介された。県の教育委員会でも、山形方式を少人数学級と並ぶ山形県教育の特色と位置づけている。



堀米 幹夫 氏

昭和44年教員採用。西川町教育委員会、山形県生涯学習センターなどを経て、現在は山形県立北村山高等学校長。基金は昭和54年に設立。

張崎 私は二十年近く小学校で教員をし、また教育委員会で社会教育課の指導主事を務めた。ここでは、学校教育と社会教育が「別物」であることをつくづく感じた。どちらも子どもを育てる仕事であることには変わりないのに……。私は、「子供を育てる」ことを中心にして学校教育と社会教育を連携融合させる活動を進めてきた。具体的には、学校と公民館が子供を育てると同じ同じ地平にたつて教育活動を展開しようというものだ。例えば、社会科の「下水道や水道」にかかわる学習では、公民館は行政の仕組みを知ってもらったための「事業」として、学校では「授業」として展開することが可能だ。教育の最前線では「事業」も「授業」も融合することは難しいことではない。しかし、校長先生などに公民館との連携を進言しても、学校の壁は実に厚かった(苦笑)。そして、再び教育の現場(学校)に戻って、今度は逆に、学校に公民館を引き入れようとしているが、外のものを学校内に入れることに対しての先生方との感覚の違いを実感している。

大人の子育て観が変わる

子どもを通して見える家庭、学校、地域社会の問題点は何か。

冨塚 最近の親の姿を見てみると、「自分で子どもを育てる」という認識が薄くなっているような気がしてならない。親が忙しいのは昔も今も変わらないが、私が活動を始めた二十年程前は、子どもを迎えに来て帰宅する際に、「私たちに「ありがとう」と言ってくれたら、私たちが「ありがとう」と言ってくれたら、折に触れて、「自分たちにできることがあったら何でも言って欲しい」と声をかけてくれた。すなわち、学童保育というものを、「自分で子育てをする延長上にあるもの」ととらえていた。それが、現在では「お金を払っているのだから、これくらいのことはしてくれて当然」という意識に変わってきている。

張崎 大人の子育て観が変わったのだらう。今は、お金を出せばなんでも買える時代。子育てですら、お金を出して「外注」することが多くなった。娯楽だって、テーマパークやテレビゲームのような外注ものばかり。家



張崎 正裕 氏

昭和58年教員採用。天童、南陽、山形市内小学校、山大教育学部附属小学校、山形市教育委員会などを経て、平成13年より現職。

族が互いに向き合うことが少なくなって、家族同士に「すぎ間」ができてしまったように思う。

鈴木 思春期の子どもに対する学校の管理体制も問題だ。私も大学で心理学を勉強し、思春期というものを頭では理解していたが、いざ自分の子どもと向き合ってみると、本当に思春期は化け物だと感じる。ささいな事に反発し、手がつけられないかと思うと、逆に幼い面をあらわにすることもある。もっとも、そうした時期を乗り越えれば、しんの強い大人に成長すると思うのだが、逆に押さえつけて社会に出せば、何を考えているのか分からないようなおかしな人間になってしまう。加えて、中学や高校の授業は本当に面白くない。私も授業参観に出かけることがあるが、はっきり言って私が授業をした方が上手で面白いと思ってしまう(笑)。特に高校では、楽しく面白いいことをどっしてあんなにつまらなく教えるのだろう。高齢者のピアノ教室にしろ、「ビジュアル源氏物語」や「歴史群像」などの本にしろ、世間では楽しく学べるマニュアルや教材があふれているのに。中でも進学校は、教育内容も先生の教え方も旧態依然としており、これでは学習意欲が低下しない方がおかしい。思春期の子どもたちの教育状況は、日本の未来を暗くしている。

体験こそいい子どもたち

一方で地域に目を向ければ、他人の子どもをしかることも少なくなった。せいぜいあいさつの声掛けをして、子どもに「いつも見ているよ」という認識を持たせるくらいしかできない……。

富塚 実は先日、下校中にショッピングセンターで遊んできた三人組の男の子をしかった。今の地域社会では、他人の子どもを怒る人がいないのが問題だ。その点、クラブの子どもは近所の人も叱ってくれるので、良い環境にあると思う。

堀米 今の子は、兄弟も少なく、周りに子どもも少なく、縦横の人間関係もなかなかできない。そして、あらゆる意味での「体験」が少ない。私たちが子どものころは、泳ぎや遊びも地域の先輩に教えてもらったが、これからは親や地域社会が子どもにそういう機会を与えなければならぬ。

富塚 本心に、体験というものは重要だ。短大で幼児教育を専攻してきたのに、米のとぎ方も分からない職員がいるのには驚いた。勉強だけで過ごしてきた人は、決められた仕事はちゃんとやるが、それ以外の対処ができない。

鈴木 まさしくそれは、管理教育の弊害だろう。私の医院では、毎年、医療事務系の専門学校から若い学生を二、三人ほど研修生として受け入れているが、最近の学生は自分の意志というものがなく、自分で人生を切り開いていくという意欲が見られない。つまり、自分が何に向いているかも分からず、ただ黙って言うことを聞いていれば何とかかなると思っているようだ。「生きる力」を感じない。

富塚 それから、現代においては、子どもたちの周りにもさまざまな情報がはん濫しているが、子どもたちが本当に言葉の意味を分かかって言っているのかなあと思うこともある。昔に比べると、子ども自身にもゆとりがなくなりつつあるのかもしれない。

生きる力を養う「総合的な学習の時間」

体験という意味では、平成十四年度から小中学校で始まった「総合的な学習の時間」に期待がかかる……。

張崎 私が担任している学年では、「食と農」に取り組んでいる。地域の方から畑を借りて農作物を作り、収穫したらそれをみんなで賞味する。また、地域の店や公民館の協力を得て、みそ作りや豆腐作りなどを体験する。体験は蓄積するものだ。体験があれば知識はそれについてくる。逆に、知識があれば体験はそれに裏打ちされてくる。つまり、体験が先か、知識が先かが問題ではなく、活動を通して知識と体験が総合化されることが重要なのだ。これが「生きる力」になってくる。よく私は「生きる力」を、無人島で生き抜く力「サバイバルの力」と言い換えて話すことがある。「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)は、これまで縦割り(教科)で教えられてきた知識を総合化する作業である。総合学習は「学び」についての考え方であり、思想と言ってもいいだろう。だから、逆に算数や国語といった個別の教科を総合学習的に考えることができる。そうすると、それらの教科で培われる知識がどこにつながり、どう働いていくかが現実味をもって見えてくる。これはまさに「問題意識」だ。そのように考えれば、総合学習はこれまでの教育を変えていく非常に夢のあるツールだ。

鈴木 小学校の総合学習は確かに素晴らしい。小学生の発想もすばらしいし、先生も一生懸命に取り組んでいる。おそらく、小学校では次のステップ(中学)のことを先生も思

童もあまり意識しないので、総合学習にも集中できるのだらう。それに対して中学校や高校の先生は、次のステップ（進学、就職）へ、いかに生徒を送り出すかという意識が先行し、よき地域人、社会人としての人格や教養、ものの考え方を教えるという意識が弱い。したがって、中学校の総合学習の授業を参観しても「なんでそんな貧相な発想しかできないの？それで全力なの？」と思うことがある。平成十五年度からは高校でも総合学習が始まるが、中学、高校の先生の意識改革が急務だらう。

張崎 総合学習は経験の積み重ねが大切だ。今年始まったばかりであり、今の中・高生は経験がないので仕方がない面もある。しかし、これからは小学校で総合学習を経験した子どもたちが中学、高校へと入っていくので、次第に良い方向に変わるだらう。また、地域には画家やお医者さん、職人など、それ



地区民総出のメダカ救出SOS作戦（余目町家根合地区）

ぞれの分野の専門家がたくさんいらっしやる。そういう人たちの知識や技を学校の学習の中で生かしていくことも大変意義がある。つまり、教師にはそれらの学校外の学習にかかわる「ねた」をコーディネートする力が必要ではならない。ただ専門家に丸投げするだけではいけない。司会者じゃないのだから（笑）。すなわち、専門家と子どもとの間に立つて、専門家の知識を子どもに伝えていく仕組みをつくり「学び」をプロデュースするのである。これがこれからの教師の能力の一つになるだらう。コーディネートすることが、教師の資質を高める有効な手段にもなるだらう。

若者にはエネルギーがある

高校生ボランティアも貴重な体験だ。堀米 もう二十五年前になるが、西川町の下堀地区に「下堀高校生ボランティア会」というサークルができた。当時同地区には、百三十戸に二十八人の高校生がいたが、町内には高校がなかったため、中学卒業後はみなバラバラになっていた。だから、地域も何もあつたものではなかった。そこで、下堀高校生ボランティア会」というサークルを作り、二十八人の高校生が集まってボランティア活動を始めた。その一つが「おはよう走るつ会」で、毎週日曜日の朝に地区の子どもを集めて、ラジオ体操と二キロのランニングを行った。年間五十回もやったのである。山形県の地図をモチーフにしたスタンプ帳が人気で、子どもたちはこぞってスタンプをもらいに来た。最初は活動に消極的な高校生もいたが、そのうちみんなで協力するようになった。その後、こ

のサークルは全町の高校生を対象とした「くれよん」と名称を変えた。そして、今、そのサークルのOB会では、町内を流れる寒河江川に架かる橋の欄干に、「山形方式」発祥の地」というモニュメントを作ろうと計画している。もつとも、観光客を呼び込んで地域活性化の起爆剤にしようという意図もあるようだ（笑）。

「山形方式」が根付いたのはなぜか。堀米 まず、山形県は青年団活動が盛んだったという時代背景がある。最盛期には県内で六万人の団員があり、「地域で集まって何かをやる」という土壌がすでにあつた。そして、高校生同士の交換交流が行われたことも重要だ。天童市の山形県青年の家で一年一回開かれてきた、昭和五十四年から始まった県内市町村高校生交換研修会では、ボランティア高校生の熱気があふれている。今の高校生は覇気がないのではなく、エネルギーを発散する場がないだけだと思う。

張崎 まさに堀米先生のおっしゃるとおりだ。若者にはパワーがあり、エネルギーがあり、アイデアがある。そのことは、昔も今も変わらない。むしろ、それを生かせなかったのは、われわれ大人の責任だ。

鈴木 「ここでエネルギーを思いっきり発散していいのだよ」と導いてくれる仕掛け人というか、サポートする人がやはり重要なのだらう。私も大人の一人として、その責任を果たして生きたいと思う。

仲間意識が地域を支える

堀米 実は、ボランティア活動を経験した高校生は、地元に着したり、いったん地元

を離れてもUターンしたりするケースが多い。それは、地域に仲間がいるからだ。逆に、地域に仲間がいないと、せっかくUターンしてもまた出て行ってしまふ。つまり、いくら若者の流出や少子高齢化を嘆いたところで、地域の仲間意識が醸成されなければ問題は解決しないということだ。それには、学校や家庭だけでは限界があり、やはり山形方式のような「地域」の役割が重要だ。そして、学校も部活や勉強だけでなく、こうした活動も認めるべきだろう。

富塚 クラブでは、子どもは学年の枠を超えて遊んでいる。時間割の関係で、一年生から帰ってくるが、最初は一年生同士で遊んでいるも、二年生、三年生が帰ってくる、自然とタテ割り意識が芽生え、上の子はリーダーシップを取り、下の子の面倒を見る状態ができてくる。私たちはこれを「昼間の兄弟」と表現している。少子化が進む中、こういったコミュニケーションは大変重要だと思う。

堀米 山形県高校生ボランティアOB会という全県レベルの組織があるのだが、OBが話し合いのために子どもを連れてやってくと、親が議論している間、大きい子どもは小さい子どもの面倒を見てちゃんと遊んでいる。つまり、子どもたちは親の活動を見て育つから、自然とそういうことができる。ボランティアの精神は、ちゃんと世代を超えて受け継がれていると思う。こうした活動を通じて、地域への誇りや人の面倒を見ることの喜びを知ることが、メンバー一人ひとりの生きる柱になっている。そうなる、むしろボランティアというよりは、ただ人間として「あたり前」の活動を楽しくやっているといえる

のではないかと考える。

富塚 あくまで予想だが、学童保育の経験があると、高校生ボランティアや総合学習などの活動にも積極的に参加しようと思うのではないか。

張崎 仲間意識という点では教師も同じだ。どうも先生は学校の中ばかりで仕事をしているように思う。もっと学校の外へ出るべきだ。学校の外では時に立場が弱いこともあるが、そこで打たれれば強くなる。私も市教委の経験を通じて「いぶん打たれ強くなった（笑）。そして、打たれ強くなるということは、ネットワークや人間関係ができるということだ。日本の教師は資質が高いのだから、総合学習などで学外へ出て行けば、さらに資質を高めることができる。

堀米 張崎先生のおっしゃるとおり、教師ももっと地域とかかわるべきだ。なぜなら、教師だって「地域住民」なんだから。

学校、親、地域社会が一体に

子どもと地域とのかわりについて、もう少し詳しく。

富塚 以前、クラブのOBで、その後不登校になってしまった子どもから、クラブに連絡が来たことがある。そういうことがあると、子どもたちの「よりどころ」としての学童クラブの重要性を痛感する。

堀米 札付きの不良だった子が、地域の先輩の一言で更生して、その後立派な職業についた例もある。ボランティアを通じて地域の中で縦の関係を作ることは大変重要だ。そして、そうした人のつながりは、本人たちにとって必ず大きな財産になる。

張崎 私たちが総合学習で取り組んでいる

「食と農」では、親（PTA）も子どもと一緒に汗を流す。それも、種まきから収穫までの期間ずっとだ。となると、親は「お客さん」ではなく、共に農作業にかかわる仲間になる。それゆえに、収穫祭の時には親は堂々とやってきてごちそうになっていく。こうした活動は、よくあるPTAの親子運動会のような年一回程度のイベントに比べれば、はるかに主体的で充実感があると思う。また、収穫した農作物は当然、畑の貸主や地域にも還元する。今年も作物だけでなく、子どもが作った草木染めの作品もプレゼントした。そうすることで、地域住民との信頼関係が構築される。つまり、総合学習を通じて、大地、人、地域、社会、友との絆を深め、「地域に生きるとは何ぞや」ということを振り返って考えるようになるのだ。学校は地域によって支えられている。地域は学校の最大のサポーターだ。

富塚 あかしあクラブでは、建物の近くに畑があり、今も畑作業をやっている。おやつなどで出た生ゴミも、畑に戻している。そして、収穫した作物で炊飯活動やバザーをやり、その収益で子どもたちと旅行に行くこともある。炊飯活動では地域の方々に迷惑をかけているかもしれないが、今のところは理解をいただいている。

鈴木 先生が部活で忙しく、授業の準備も不足気味という状況もあるのではないかと。いっその部活を学校から切り離して、地域スポーツのような形態にしてはどうか。スポーツ少年団のように。そうすれば、先生も時間にゆとりができ、授業の準備に時間を費やして面白い授業を行うことができるし、地域活

動にも参加・協力できるよつになるだろう。

張崎 私がいる第十小学校では、来年度から二期制（前・後期制）に移行する。規則が変わって、校長と市教委の判断があれば変更が可能になった。そうすると、夏休みが独立したのではなく、前期の一部となる。すなわち、夏休みも学びの場となるのだ。例えば、総合学習でいえば、夏休みに畑の観察をして、休みが終わったらその成果を報告する。これを一つのチームで行えるということだ。また、二期制にすれば通知票の回数が減る。当然、通知票にかかわる事務の時間が減る。それだけ教師が授業にかかわって時間を有効に使うことが可能となる。いい授業をつくるための授業の準備に時間が回せるようになる。

堀米 山形県は、人口あたりの公民館数が全国有数だが、これをもつと子どもに開放するべきだろう。そこで、いろんな職業の人が子どもとかかわる。学校の先生も、地域に帰れば一職業人に過ぎない。地域の子どもを地域で育てるといった場合に、公民館はそのきつかけになりうるのではないか。

子どもの価値をもつ一度考え直す

そのためには、大人の意識改革も必要……。

鈴木 大人はなんだかんだ言っても、結局は子どものために生きている。だったら、子どもとかかわることをもつと大事にして欲しい。すなわち、人生の喜怒哀楽の大部分が子どもによつていふという価値観に、大人を誘導するべきではないだろうか。今後、そういうスローガンや県民運動を仕掛けていくことも必要に思つ。

「変革の時代」を利用する

今日は、軸足の同じ人が集まったので、それぞれ立場は違つても、話題に共通点が見出せた。最後に、今後の課題をひと言ずつ。

富塚 現在、山形市内には二十八の学童クラブがあり、県内では三十五市町村に百二十四ある。少子化で子どもが減る一方で、学童保育に入る子どもはむしろ増えている。おそらく、核家族化の進展や、女性の就業率が高まったからだろう。学童クラブは、公営のものもあれば民営のものもあるが、あかしあクラブを含めて、運営はギリギリとこが多い。行政もそうした状況を認識し、これからも資金面や制度の面で一層学童クラブの支援に力をいれて欲しい。

鈴木 教育を地域の問題としてとらえた時、幼少年期の子どもたちのかかわりは徐々に増えてきたが、思春期から社会に出て行く間の期間にほとんど目が向けられていない。息子たちに言わせれば、小学校は楽しかったが、中学、高校と進むにつれ、だんだん学校が面白くなっていくという。端的に言えば、授業が面白くないからであるが、先生はもつと、子どものモチベーションを大切にしたい授業をして欲しいと思う。加えて地域からも中・高生に対し、一週間程度の職業体験、継続的な地域活動やボランティア活動のサポートやかかわりなど、そうした機会や仕組みを作つていく必要があると思う。中学校での絵本読み語りも、その第一歩のつもりでやっている。

堀米 高校生ボランティア（山形方式）も、二十五年前、ほんの身近な一つの町内会の小

さい活動から始まつた。あまり大きいことを考えず、身近なところから積み重ねていけばよい。子どもは地域の「未来」であり、地域の子どもは地域で育てるといふ意識を育てることが重要だ。親や地域は、子どもがいろいろなことを体験できる機会を与えるべきだろう。それが、ボランティアのように形のあるものならば、なおよい。子どもがいようがいまいが、他人の子だろうが関係ない。地域がそういった仕組みをどのように構築していくか、これからも考えなければならぬ。まさしく生涯学習だ。

張崎 先に申し上げた通り、私の学校は来年度から二期制に移行するが、これは学校改革のための「きつかけ」と考えている。つまり、二期制移行を利用して学校を変えようというのだ。例えば、二期制になれば「運動会をいつやるか」という話になる。そうなること、漫然と百年間続いた運動会そのものの存在意義を議論することにつながる。そうした議論を積み重ねて学校を変えていく。その意味で、今は、学校教育を取り巻くシステムの変化を利用して、学校自体の中身を変えていける良い世の中だと思つ。

鈴木 結局のところ、教育システムや建物などハードの部分だけ作つても、人々の意識というソフトがそれに追いつかなければ意味がない。せつかく作つた枠組みを骨抜きにするのは、日本人の得意技だから（苦笑）。皆さんがおつしやるとおり、まずはしっかりと目的意識をもつことが大切なのだろう。

長時間ありがとうございました。